

◆あなたに語る・時代を超えて生きる心◆

てんじ かいせつ
 展示中の作品について、研究員が分かりやすく解説します。

うさぎ
 兎と月の連想ゲーム

■月の兎

夜空に浮かぶ月の模様に、兎の姿を探したことがありますか？「月には兎がすんでいる」というお話は、中国から日本に伝わりました。さらにさかのぼると、インドの古い古い記録にも、月の中の兎の話があります。どうやら、インドの「月の兎」のお話が、中国を経由して、仏教に関するお話とともに日本に伝わったようです。

図1を見てください。これは、中国・唐の時代、今から1,100年以上前に作られた鏡の裏面です。上のほうに丸いかたちが描かれていますね。これが月です。昔の中国の人は、月の世界をどんな風に想像していたのでしょうか。よく見てみましょう。

真ん中にあるのは、桂の木。この「桂」は、日本では「木犀」と呼ばれている木で、秋になると、よい香りの花を咲かせます。中国の古いお話では「月には500丈（約1,500メートル）の高さの桂の木が生えている」と語られました。

その大きな桂の木の下にいるのが、蟾蜍と兎です。言い伝えによれば、この蟾蜍は、もとは地上にいた女の人でした。夫が手に入れた不老不死の薬を、こっそり飲んでしまい、月へ昇って、蟾蜍になってしまったんだそうです。

一方の兎は、臼と杵で何かを作っています。日本では、「餅をついている」と言いますよね。でも中国では、「不老不死の薬を作っている」と信じられました。どうして日本で「餅をつく」と言うようになったのか、はっきりとした理由はわかりませんが、満月を表す「望月」と「餅つき」が似ているので、餅つきになった、と考える人もいます。

とにかく、兎と月はとても繋がりが強いものだと考えられたので、「月にすむ兎」や「月を眺める兎」を描いた作品が、中国でも日本でも、たくさん作られました。



全体



月の拡大図

図1 月兎双鶴八花鏡 中国・唐時代（8～9世紀）赤星薫氏寄贈

■月に替わって……

日本の美術の中で、^{うさぎ}兎は、^{とくさ}秋草や^{なみ}波、^{とくさ}木賊（細長くてかたい植物）と^{いっしょ}一緒に^{えが}描かれることもあります。どうしてでしょう？ 実はこれらも、すべて月と関係があるものです。

秋は、月が美しく見える季節です。また、お能のあるお話の中には、^{びわこ}琵琶湖に映る月を見て、月の^{うさぎ}兎が波間をかける様子を想像する場面があります。^{とくさ}木賊は、ものを磨くために使ったので「磨いたように輝く月」を読む和歌に登場します。月をきっかけに、連想ゲームのように想像が広がって、やがて月をはぶいた「^{うさぎ}兎と^{とくさ}秋草」「^{うさぎ}兎と^{なみ}波」「^{うさぎ}兎と^{とくさ}木賊」の組み合わせが^{えが}描かれるようになったのです（図2）。

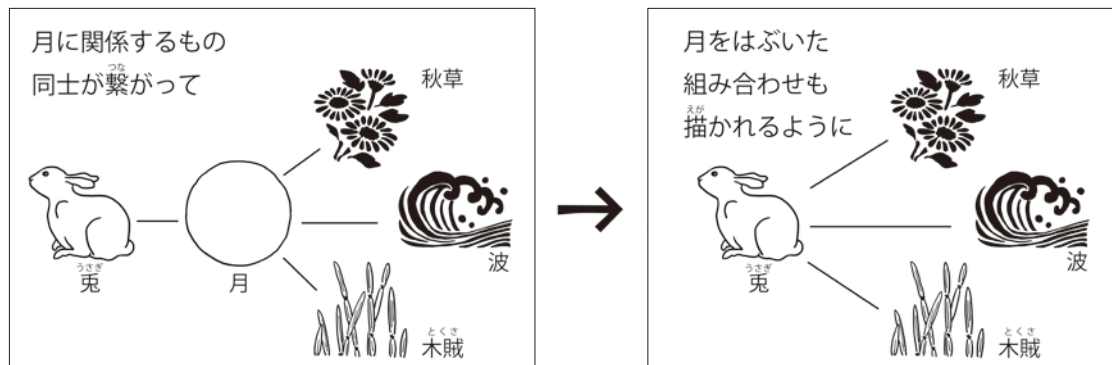
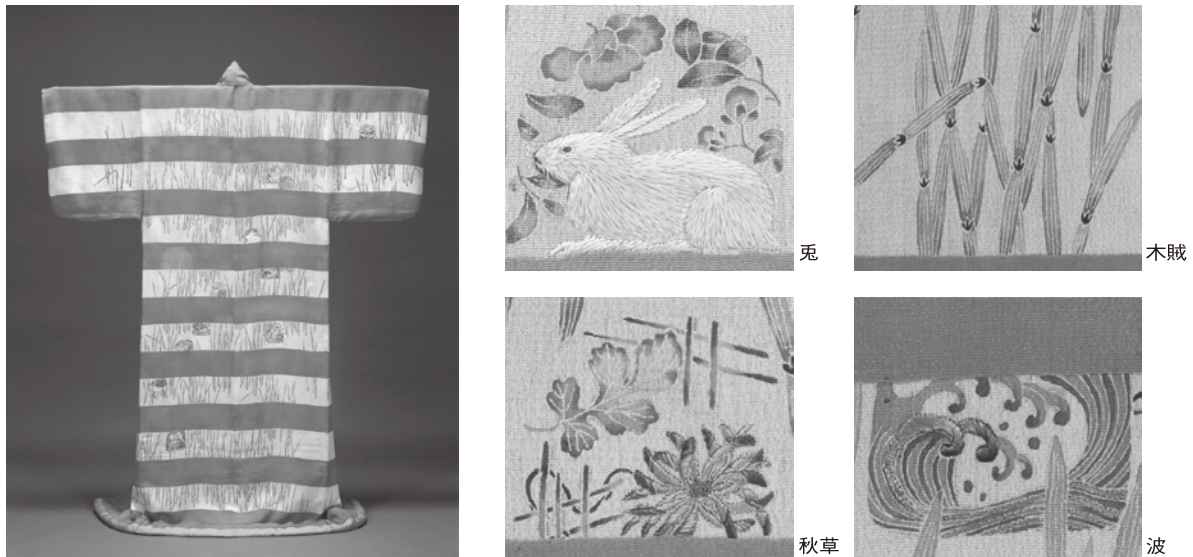


図3の着物を見てください。ここには^{うさぎ}兎、^{とくさ}木賊、^{えが}秋草、^{なみ}波が描かれています。ここまで読んだみなさんなら、もう分かりますよね。すべて月と関係があるものです。でも、^{かんじん}肝心の月は^{えが}描かれていません。あえて^{えが}描かなかったのです。まるでなぞなぞのような^{もんよう}文様です。



昔の人は^{うさぎ}兎を見て、月の世界を想像したり、秋の景色を思い^う浮かべたり、いろんな連想をしていました。そんなことを知ってから見ると、美術に登場する^{うさぎ}兎も、今までよりもっと面白く見えてきますよね。

（教育室 ^{みづたにあき}水谷亜希）